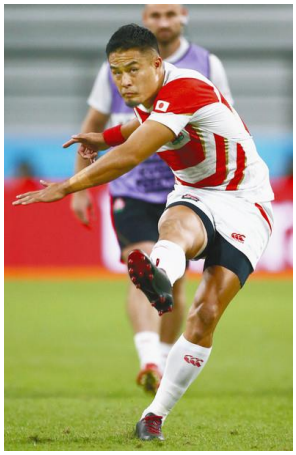
田村 優（30）“チームのため”学んだ青年　親元離れ高校で成長！

右足を振り、パスを出すたび、日本にチャンスが生まれた。ラグビーのW杯日本大会で、司令塔役の SO としてチームを三連勝に導いた田村優選手（30:キヤノン）。地元の豊田スタジアムで大歓声を浴び「僕たちがどれだけベスト 8 に行きたいか。その思いが出せた」と胸を張った。



刻々と試合展開が変わる中、瞬時に攻めるべき空間を見つけ出す。プレー中は「周りが遅く見える」という観察眼。パスやゴロキックを使い分け、サモア選手の裏のスペースを何度も突いた。味方選手を生かす姿勢は、親元の愛知を離れて過ごした高校時代に養った。

ラグビー部の吉岡 肇 監督（58）が父・誠さんの高校時代の同級生だった縁で入学した国学院栃木高校。中学まで熱中したサッカーのステップ技術で相手を抜き去るなど、当初からセンスは目立っていた。だが、その才能ゆえに単独プレーも多く、味方にパスせず一人で持ち込む場面も‥。吉岡監督は「自分を犠牲にしてボールを生かすのが苦手だった」と振り返る。

事件が起きたには強豪校が集まる 3 年夏の合同合宿。当時主将だった田村選手は練習試合でタックルに消極的だった後輩に思わず手を出した。プレーに熱くなっての行動だったが、吉岡監督は独善的にもとれる姿勢をとがめた。宿舎に帰し、翌日の練習はグラウンドの隅で見学。主将を欠いたチームは「0－100」で惨敗した。試合後、チームメートが監督の元へ行き「戻してほしい」と懇願。その姿に田村選手も行き過ぎた行為を反省し、チームに頭を下げた。「あのとき、フォアザチームが芽生えた」と吉岡監督。その年の県予選決勝。同点の状況で勝負を分けたのは、試合最後の田村選手のプレー。味方にパスを送り、花園出場を決めるトライが生まれた。

「ボールも人が動いて、みんなが『早くパスを渡せ、渡せ』という時が楽しい」。この日、7 本決めた持ち味のプレースキックと合わせ、周りを生かして勝利に導く。ジャパンの中心に、「10 番」がいる。

10/6「中日新聞」

田 村　優　　～ プロフィール ～

- 岡崎市立梅園小学校（サッカー部）
- 岡崎市立甲山中学校（サッカー部）
- 国学院栃木高校（ラグビー部）
- 明治大学（ラグビー部：大学選手権 3 位）
- ＮＥＣ・グリーンロケット（2011～2016）
- キヤノン・イーグルス　　（2017～現在）

《 予選プールＡ 》

○ 日本　30－10　ロ　シ　ア（東京）
○ 日本　19－12　アイルランド（袋井）
○ 日本　38－19　サ　モ　ア（豊田）
○ 日本　28－21　スコットランド（横浜）

《 準々決勝 》

○ 日本　3－26　南アフリカ（調布）